幼児の安心感
－母親と保育士の人間学的考察－

中　野　桂　子[1)]

The Infants' Feeling of Safety
－Anthropological Views on Mothers and Child Care Workers－

Currently, many infants spend about half a day in child care centers with child care workers. However, it is not always that the center and workers are familiar to the infant and mother. Therefore, the infant and his/her mother may feel anxious about being in a child care center.

Using anthropological concepts, this paper aims to clarify that the fundamental principle of infant care and education is providing a feeling of safety to infants, and this feeling is supported considering its mother as well as child care workers.

Originally, an unfamiliar room that can make an infant cry and can seem dangerous to him/her. Therefore, being in such a strange place as a child care center, the infant may not feel safe. Because of his/her physical weakness, the infant needs to feel safe. If the infant feels safe, he/she is able to move freely and learn actively. Hence, it is important for a mother to develop the feeling of safety in her child at home as well as at the child care center in cooperating with the child care workers.

はじめに

保育所に育児が委ねられる社会になった。一年間ほどの育児休暇を終えると、母親の手を離れて、幼児は保育所で育てられるようになる。それまでの母と子の絆は強い。都市部ではほとんどが核家族で、地域の結びつきは弱い。出産年齢が高くなっているので、幼児の祖父母も高齢である。都市部では住宅事情が悪く、祖父母と同居することは難しく、祖父母は遠隔地に住んでいる。しかも、高齢であるため、孫の世話をすることもままならない。そのため、幼児の世話は母親がほとんど負うことになる。母と子の絆が強く、固くなるのは当然のことである。この幼児が一歳かそこらになると保育所にあずけられる。幼児は母親から離され、見知らぬ人に渡されるとき泣き出す。この時、ほとんどの母親は辛い思いをする。そのことで、あれこれと悩む。経済のため、自分の仕事のため、育児を放棄したのではないか、これで子どもは健やかに育つであろうか。さらに育児の本などにふれたことのある母親は、ホスピタリズム（施設症）ということを知っていて、母親の愛情不足は、子どもが長じて、神経障害を負うのではないかなど思ったりする。

このように、保育所に幼児をあずけるとき、母親及び父親には二つの葛藤がある。一つは幼児を手渡すときの辛さ、二つは健やかに幼児が育つであろうかとの不安である。これに対して保育士はどう答えることができるか。

もちろん、これら二つの葛藤は、母親から発されたものであって、幼児から出されたものではない。この葛藤は、幼児の理解から出発してはじめて解けるものである。それゆえ、まず、幼児はいったい大人たちに何を求めているのかが、幼児

1）福岡大学大学院

に即して明らかにされねばならない。そのことによって、母親と保育士の課題及び可能性が明らかになる。

かくして、本研究は、わが子を保育士にあずける母親の辛さや不安を契機にしながら、反転して幼児が何を求めているかに迫る。そのことが明らかになれば、母親の葛藤が解かれ、保育士に求められているものも明示されるはずである。

ちなみに、本論で語る人間学は現象学的人間学である。本論は、ミズン（S. Mithen）[1]やヴァール（F. de Waal）[2]の霊長類学や人類学に多くを学んでいるが、それらと同一の学問ではない。また、この人間学は、認知心理学や発達心理学のほとんどが行っているように、幼児を第三人称として対象化し、特定の条件下において統制的場面をつくり、生後何か月でほほえんだとか、指さしを始めたとか、自分の鏡像が分かったとか、三歳半で人の表情から心の中を読みとるとかいった知見を生むことを目的としていない。幼児の人間学は、幼児と二人称的関わりを結び、幼児の日常の生活から意味を読みとる態度である。これは、ランゲフェルド（M. J. Langeveld）が語っていたように、「直覚的な、科学的に理論化される以前の前理論的な世界」[3]に関わるのであって、「それは人間の世界に対する人間の直接的な関係を明らかにすること」、いわば「人間の現存在が実際にそこで実現されている意味連関を照らし出す」[4]ということである。したがって、幼児の人間学的考察は幼児に直接向き合い、それ自体から意味を読みとる態度である。この態度によって、幼児の研究は新たな知見を得ることになった。もちろん、この知見は、対象を多数の幼児とその母親に拡大させずとも、たった一組の幼児と母親の関わりからでも得ることができる。けだし、ヤスパース（K. Jaspers）が語ったように、「人間は互いにひどくちがっている、ところが全ての人間は共通なものをもっている、ということが経験の示す二つの面である」[5]からである。幼児の安心感はこの共通の面を照射して導かれたものである。

なお、現代の人間学は、フッサール（E. Husserl）の現象学の衣鉢をついでいる。周知のように、現象学は、人間を研究する既存の諸学問が現実の生活を離れて形骸化しているとの危機感と反省から生まれたものであった。幼児の人間学もその反省のうえに立って、子どもの生活から出発する。幼児の生活は日々の身近な営みであるので、これらの言語は日常言語で表明される。それは、あたかもプラトン（Platon）の対話篇のような日常のことばである。ただ、幼児の生活に関わるので日常のことばに幼児のことばが加わっている。このことは、ランゲフェルド、ヴァン・デン・ベルク（J. H. van den Berg）、ボルノウ（O. F. Bollnow）、メルロ＝ポンティ（M. Merleau-Ponty）などにも共通している。本論文も幼児の人間学的考察であるから、幼児の状況は、日常のことばで表されている。

1．幼児の可能性

核家族では、母と子の生活が長い。それだけに強固な依存関係が出来上がっている。これは他者の介入を拒む排他的関係になる。この排他的関係は哺乳動物では一般的である。ウシ、ウマ、イヌ、ネコ、日本ザル、チンパンジーなどはいずれも母と子の強い絆をもっている。特別な場合を除いては、自分以外の子に母親が授乳することはない。チンパンジーの子も母親の授乳によって育つ。その子は三歳までは離乳しないし、どうかすると五歳まで母乳を飲んでいるという[6]。母親に密着して育っているため、母親が亡くなると、自分で物を食べることのできる五歳になっても、食欲をなくし、衰弱して死ぬことがある[7]。

ところが、人の子の場合、母を亡くしてもチンパンジーの子のように衰弱することはない。人は他人の子どもにも授乳することができる。母乳を与えてくれる人があれば、代理の母親でも子どもは育つ。人間の子は生理的早産[8]であるので、生まれた時に母親が赤ん坊に刷りこまれることもない。胎外胎児ともいえる人の赤ん坊には、ロー

レンツ（K. Lorenz）がハイイロガンの実験[9]で発見したような刷り込みは見られない。人の赤ん坊には、生後七か月頃人見知りが現れ、母親との絆の形成が見られるが、一歳半を過ぎてことばを覚え始めるとその絆は拡大される。ことばによって人の子は多くの人と関わることができる。

もっとも、いかなる環境のもとでも人の子は育って、ひとり立ちできるというわけではない。子どもが育つ環境に、ひとり立ちを保障する何かがあったはずである。この何かについて、子どもを統制化された特定の条件下において、観察・実験して、それを明らかにすることはできない。成育した大人を調査しても同様である。人は、二歳半以前のことは、ほとんど記憶がない。人の記憶は動物の記憶と違ってことばによる記憶であって、記憶はことばによることばの記憶である。一歳半を過ぎてやっと自分の名まえが、たんなる呼びかけ（sign）ではなく、自分を意味（symbol）していること、すなわち名まえは自分を指していることが分かると、その名まえである自分を中心に記憶が織られるが、まだ、ことばを文言として使うことができない。記憶が生まれるのは、三歳近くになってからであり、保育所に三歳まであずけられていたとしても、その時の記憶はほとんどない。

もちろん、記憶がないので、三歳以前の環境は子どもの育ちに無関係であることにはならない。記憶が空白になっている、およそ三歳までは、記憶ができるようになる準備の期間である。ヴィゴツキー（L. S. Vygotsky）は、思考と言語の発達路線が交差するのは、二歳頃であると語っていたが[10]、いずれにしても、三歳まではことばの学習に当てられ、それが記憶を生み、同時にそのことは自我の形成となる。なぜなら、自我は私の経験の記憶であり、私が私であるのは記憶の継続によるからである。したがって、自我は自己同一性であり、それは記憶の継続に他ならない。精神分析学をはじめ、心理学の知見は、人の性格は三歳までに決まるというが、むしろこの時期は自我の形成にとって、重要な意味をもっている。母を亡くした人たちであれ、一角の人物に育ったのは、幼児の時に自我を育む環境にいたからである。

それでは、自我の形成にとって、この期間にどのような環境が求められるのか。この問いは、この期間の幼児は、何を求めているのかと問うことに転換される。大人の目線から幼児を見ようとするかぎり大人の側の感情が入りこむ。保育所にあずけるのは、子どもが可哀想とか、子どもは家庭で育てなさいとかいった発言も大人の目線から出されているかぎり、その答えは見出し難い。重要なことは、子どもから出発することである。

2．幼児が求めていること

生命の原理として、生理的早産であった人間の幼児は弱い。それゆえ、衣食住、眠り、排泄など、幼児ができないことへの世話ないし保護が求められる。このことは自明であって、論じるまでもない。他方、人の子の場合、保護に加えてもうひとつのことが望まれている。自分自身、育児に関与してきたラッセル（B. Russell）、ボルノウ、ランゲフェルドなどは、それを安心（safety, reassurance）ないし安定感（a feeling of security）、あるいは被包感（Geborgenheit）などと称している。子どもは、安心、安定、被包を求めているという。これら、安心・安定・被包感といった概念は、既存の教育理論から思惟によって得られたものではない。これは、子どもの状況への関わりから導かれたものである。したがって、これらの概念は論理学で行うような定義ではないので、経験に即して言えば、これらの概念は畢竟、安心感に統一することができる。この安心感は、それが導かれた状況が違っているとはいえ、いずれも共通な意味をもっている。したがって、この安心感の理解には、再び、この概念が導かれた子どもの状況に立ち戻らねばならない。それがあってはじめて、安心感が具体的な意味を現してくる。

ラッセルは、「幼児は、その弱さのゆえに安心を必要とする」[11]という。であれば、その弱さ

とはどのようなものであるか。哺乳動物のなかで、聴覚の発達したものは大きな音に驚き、視覚の発達したものは暗闇を避ける。これは防衛本能である。人は、視覚も聴覚も発達しているので、大きな物音と暗闇を恐れる。その点で幼児も例外ではない。たとえば、幼児は、花火の爆発音や雷鳴のような大きな音に驚く。だがこれは一過性のものである。もっと驚き、恐怖を示すのは闇黒である。突然、停電があったりすると悲鳴に近い大声をあげる。薄暗いところに出るのを怖がる。これは、たんに目に見えないということではない。そうであれば大人も見えないわけであるから、恐怖を覚えるはずである。大人が恐怖を覚えないのは、闇黒であっても、その世界が知られているからである。だが、幼児は、まだその場を知ってはいない。その知らないところにいるのに、それを見ることができないとなれば幼児にとってそれは、二重の恐れとなる。幼児にとって、目に見えないことは、全く知らないところに入ったということである。幼児がまだ知らないところにいるのに、それが急に真っ暗になる。ここで幼児は、無気味で、恐ろしい、危険な、わるいところに落とされる。

三歳になって幼児は一人で昼間はトイレに行くことができても、夜は一人でいくことを怖がる。とくに田舎の、離れにあるトイレは薄暗く、他の人の付き添いもないのに行くことができない。夜には家の庭でさえも出ることを怖がる[12]。夜には植木の暗がりの下に魑魅魍魎が潜んでいて、じっとこっちを見ているように思われる。木の葉のそよぎもお化けに見える。幼児にとって、見えないことは知らないことであり、知らないことはかくも恐ろしいことである。

したがって、幼児が知る・知らないといったことは大人が知る・知らないということとは違っている。幼児において、知るは認知のことではない。幼児には、知る主体としての自我が未生であるか、芽生えはじめたばかりである。幼児が知っているところとは、明るく、危険のない、いつも見ることのできる落ち着いた、安心できるところである。

幼児が住むところは狭い。それは家屋である。これが幼児の世界である。ここには、主に親が居て、部屋を掃除したり、家具、物品を整理したりしている。いつもきまった順序で、生活がくりひろげられ、きまったところに物品がある。母親は、それを知っている。なぜなら、母親がそうしているのだから。この母親のもとで、幼児は、自分は安定した所にいることを知る。安定は安心である。もちろん、部屋の中の一つひとつの物は、子どもが知らないものである。しかし、こうした物は、安心できるところにある物であって、怖いものではない。そのため、幼児は、珍しい、興味をそそるものをつかみ、ながめ、たたき、なめる。これは、幼児にとってこの物が何か分かったことになる。分かったから、次は別の物へ向かう。こうして、幼児のいる部屋は、あたかも突風が吹き抜けたように荒れ放題になっている。これは、幼児にとっては学習であって、止められないことである。

安定した部屋では、幼児は安心して行動ができるので、その行動は活発で、学習が旺盛である。それゆえ、幼児が求めていること、すなわち幼児にとって大切なことは、「たとえこの世に何が起ころうとも、わが家の中では安全である」[13]という安心感である。もちろん、この安心感は、親が幼児をのべつなしに面倒を見るとか、幼児を甘やかすとかいうことではない。両親に必要なことは、平常性であり、平静さである。この平常性や平静さの状況について、ヴァン・デン・ベルクはこう語っている。

> 子どもの最もおそれているのは、拒絶であり、受けいれられていない、という感情なのである。つまり、愛情より、さらに安心を求めているのである。かならずしも子ども自身に関係しない行為であっても、ごくささいな安心できる行為のなかにふくまれているある種の愛情を、子どもは求めているのである。とりわけ、一般に物事を行なう際のその安心できる仕方、たとえば家の

掃除の仕方、母親の台所での立ち回り方、来客を歓迎する仕方、そして父親が座ったり、肉を切ったりする仕方、煙草の火のつけ方、等々にまつわる安心感を、子どもは求めている。こうした、子どもには何の関係もない平凡な事柄が、子どもを安心させる。もし子どもがそれらに安心できれば、自分自身に向けられた行為にも安心できよう。ささいな行為に安心できず、平凡な物事が信じられないようなら、自分自身に向けられるあらゆる行為を、疑ってかかることだろう[14]。

母親がどこからともなく、さりげなく幼児を気づかっている部屋で、幼児は安心を得る。ここは安全である。それゆえ、自由に動きまわることができる。すなわち、朝起きるといつものとおりに母親に出会い、起こるべきことが起こり、物はあるべきところにある。この部屋には、いつもかくかくの事が起こり、いつものように、きまって、しかじかの物がある。それは、かたち、きまりや秩序である。世界が秩序であることは、ことばをたしかなものにし、記憶を生み、自我を醸成する。

このような状況があるとき、母親は母親である者として幼児に関わったのであり、ここで幼児は母親をもったということになる。このことは、幼児の状況から出発する現象学的人間学においては当然の帰結である。大人の目線から見れば、子どもを産んだ女性もしくは育てている女性がその子の母親である。だが、幼児においては、安心感が現れるような状況を生む人が母親である。これは、たんなる母親ではなく、母親であることに他ならない。母親であることを拒絶した女性はいつの日か幼児が成長したとき、母親としての存在を拒絶されることも諾うことができる。

3．保育士に求められるもの

かつて、エイヤー（A. J. Ayer）はラッセルについてこう語っていた。

ラッセルはムーアやヴィトゲンシュタインやカルナプの後継者たちに対するよりも、ロック、バークリィ、ヒューム、ジョン・スチュアート・ミルたちの方にずっと近い[15]。

ここで語られているラッセルの論理分析及びイギリスの経験論の哲学において、主たる対象となるものは、探求の成果が収められている書籍である。この点で、ラッセルはラングフェルドやボルノウ、ヴァン・デン・ベルク、メルロ＝ポンティなどとは別の知的気圏にいる。

しかし、ラッセルは、幼児に出会ったとき、従来の哲学的知見を封印する。そして、幼児そのものが語ることを聞き取ろうとする。幼児はそうあるように人びとに訴える。このとき、期せずして、ラッセルは現象学的人間学の方法をとることになる。その意味で、この方法は、理論や学説ではなく、対象に関わる態度である。幼児と自然に向き合う者には誰であろうと幼児はその存在が何であるかを現してくる。ラッセルはこうして幼児の安心感に到達している。

かくしてラッセルは語る。

子どもは二つの相対する要求つまり安全と自由（freedom）をもっている。そのうち後者は前者を養分にして次第に大きくなる[16]。

両親の愛情は幼児にこの危険な世界で安心感を与え、大胆に環境を調べ、その中に踏み込んで行けるようにする[17]。

ラッセルにとって、自由は権利としての自由、抑圧の不在としての自由、自分の思いどおりのことができる行動・選択の自由あるいは哲学における意志の自由ではなく、いま・ここの状況から未知の世界へ歩み出る冒険心や勇気の謂である。安全および安心は、幼児の自由が成長する土壌のようなものである。この土壌があって、幼児は育

つ[18]。

また、ランゲフェルドは、こう語っていた。

> 子どもは現実の要求を、それによって彼が脅かされていると感ずることが少なければ少ないほど、自明なものとして承認するであろう……彼は、現実を恐れず、困難や自由を制約するものや課題を、したがってまた、責任をみずから引き受ける用意がある[19]。

この安心感は、大人になっても生きる力となる。安心感をもって人生にたちむかう人は、不安をもってたちむかう人よりもずっと幸福である。たとえば、もし、ある人が断崖にわたした狭い板の上をあるいているなら、その人が、もし、こわいと思ったら、そう思わない場合よりもずっとおちる危険がある。そして、これと同じことが人生の行為においてもあてはまる。

さらに、ボルノウは次のように語る。

> 意味をもち、安心して住めるそのような世界は、幼児にとっては、原則として、特定の愛する他人に対する、したがって第一に母親に対する、人格的な信頼関係においてのみ開けてくる[20]。

かく見ると、幼児が求める安心感を生み出すのは、原則として、第一に家庭の両親、とりわけ母親であるということになる。時期としては、七か月頃、腰がすわって、地平と垂直の姿勢がとれ、視覚が活発になった頃である。この頃、母親以外の人への人見知りが始まる。これは、幼児にとって母親が安心・安全を保障する人になったことである。ここで幼児は、母親がいつものように、さりげなく行動していることで安心する。幼児は、安全であることを保障されることによって、安心を得る。そのため、停電で、部屋が真っ暗になると母親を探してかけ寄る。自宅でも母親がトイレに入って見えなくなると、ドアの前で母親を呼ぶ。他の家は知らないところなので、一寸でも母親が見えないと脅えて探しまわる。デパートのトイレに入った時、幼児は、内側から「おかあさんいる？」とくりかえし問う。逆に母親がトイレに入った時には、ドアの外から「おかあーさーん」と呼び続ける。これらに対して母親は「はーい、いるよー」と何度も答えている。幼児には、他の家もデパートも知らない、危険で、怖いところである。そのため、庇護してくれるお母さんを求めている。保育所においても、幼児は母親や父親に求めたような安心感を求めている。これは可能であろうか。

ボルノウは、「原則として」「第一に母親に対する」と語っていた。ということは、子どもに安心感を与える者は、必ず母親であるということではない。ボイテンディク（F. J. J. Buytendijk）は、「愛の最初の讃歌は子供の全身で唱われる母乳への讃歌であった」というアラン（Alain）のことばを引用していたが[21]、授乳は母親以外の人からも可能である。さらに、穏やかで、落ち着いた、安全な日々を子どもに与えることができる人は、母親だけに限らない。幼児が学び、育つことに、大切なものは、幼児にとって、ここは安全であるという安心感であって、それは他の人びとにもできることである。いわば、母親の代理として母親が果たすことを他の人にもできる。したがって、保育士にもその可能性が開かれている。

4．可能性の原理

現代社会において、安心して生きることのできる共同体を望んでいるのは、高齢者や幼児である。両者はいずれも他者に支えられて生きている。わけても、幼児は、安心がなければ、自立して、人間に育つことが難しい。したがって、幼児は何よりも安らかな共同体を望んでいる。

かつて幼児は、共同体のなかで生まれ育った。ここには、幾十年も住みついている人びとがいる。母や父の親族も近くにいる。幼なじみがたくさんいる。日頃親しく付き合っているおじ、おばがい

る。家には老若男女いずれもがよく訪れる。冠婚葬祭はその家で行われる。ここには生老病死がある。幼児は誰からも声をかけられ、抱かれる。みんな母や父が熟知している、安心できる人である。それに、幼児はたくさんの兄や姉、祖父母などと一緒に暮らしている。それゆえ、「親はなくとも子は育つ」といった語りも過言ではなかった。

しかしながら、現代にはかつてのような共同体はない。それに代わるものとして、保育所が現れる。これは、母親や父親および社会の要求に応えたものであるが、ここには幼児の望みが託されている。それでは、保育所は、幼児・家族とを結ぶ共同体になりうるのかという問いが生まれる。

地域共同体とちがって、保育所は、学校と同じように人為的にできた制度で、一過性のものである。保育は、限られた期間で切りあげられる。そして、学校の教師と同じように、保育士は、母や父が知らなかった第三者である。ただ、保育を専門とする職業人であることが、かつての共同体で育児に関わる人びととは違っている。育児についての専門的知識をもった保育士に幼児は安心を望んでいる。この望みはかなえられるものであるか。かなえられるとすればどのようにしてであるか。

この望みは、幼児自身から発せられる。幼児は、あどけなく、愛らしい、かわいい顔かたちをしている。これは、およそ生きもの全般に見られる。イヌ、ネコ、鳥、草花でも、幼いものは、いたいけで、かわいらしく見える。これは、かばってあげたいとの気持ちを喚起する。この幼いものには、動物も寛容で、他の動物の子であっても排除することを控えることがある。これはヒトも同じである。かわいいということは、かばってあげたいということのみならず、めんどうを見たいという気持ちを起こさせる。めんどうを見てあげないとかわいそうと思ってしまう。

人の幼児は、他の動物以上にめんどうを見たいという気持ちを起こさせる。とりわけ、人の子は新生児微笑（または生理的微笑）に始まり、幼児になるとそれは人なつこい笑顔に変わる。この表情は人だけのものである。大人たちは、これをかわいいと感じ、その期待に応えたくなる。これは、人間の自然、いわば人間性（human nature）である。かつて、アダム・スミス（Adam Smith）は人間性について、日常の経験から得た知見によって、こう語ったことがある。

> 人間はどれほど利己的であると考えられても、その性質の中には他人の運命に気を配り、他人の幸せを見ることが楽しいということ以外何らえることがない場合にも、その人たちの幸せが自分に欠かせないものとする何らかの原理が存在する[22]。

スミスにとって、この原理は自然が生み出した共存的原理である。それゆえ、このような自然的原理は、チンパンジーのような類人猿にも見ることができる。たとえば、一本のバナナを手にして食べようとしているとき、他のチンパンジーがやってきて、物乞いするかのようにじっと見つめると、しぶしぶながらも分け与えるという[23]。もらった相手は、それをうれしそうに食べる。そのうれしそうな表情を見て、やった方もうれしくなる。相手の喜びが自分への報酬、すなわち喜びとなる。こうしたことは、人間にはいくらでも見ることができる。たとえば、身体の不自由な人が車内に立っている。苦しそうな表情を見て、自分も苦しくなる。自然と席を代わる。席に着いたその人の喜びを感じて、自分もうれしくなる。相手の喜びが自分への報酬、すなわち喜びである。

幼児には、とりわけ、めんどうを見る人を喜ばせるところがある。幼児は、めんどうを見る人に対して、何もお返しするものがない、することもできない。しかし、めんどうを見る人には幼児の笑顔だけで十分なのである。保育は、このような人間性の原理に立っている。見ず知らずの保育士に幼児が託され、その見ず知らずの保育士が見ず知らずの子を守ることができるのは、このような原理による。この原理によって保育所は、第三者

の、人為的制度であっても、そこで働く保育士は幼児の安心感を培うことができる。

むすび

幼児は母親だけに育てられたのではなかった。子守り、里子、あるいはイスラエルのキブツなど、母親や父親から離れて育つ子はいくらでもいた。そして、現在、保育所の制度がある。保育所は、子守り、里子、キブツのいずれでもない。公的制度としてはキブツに近いが、両親と一緒にいる時間は、キブツよりも保育所にあずけられる子の方がはるかに長い。だが、いずれにおいても、幼児が求めているものは安心感である。したがって、幼児は、幼児が両親といたときにあったような安心感を保育所においても求めている。この安心感は、幼児がいるこの部屋が安全であることを母親によって保障されていることから生まれるのであった。保障するとは母親がこの部屋のことを知っていること、知っているからには危険なものはないということであった。母親が知っているものは安全で、怖いものなど何もないということが幼児にとって安心感となる。

かくして、母親が保育所に幼児を託するとき、母親は、保育士を知っているということが幼児の安心感を生む。知っているというのは、保育士の個人的な情報を知っていることなどでは全くない。知っているというのは、母親が保育士を信頼し、明るく交わり、何事もないかのように、ごく自然に幼児を託することができるとの謂である。保育士もまた、それを当然のように、さりげなく受け容れる。母親と保育士の所作、振る舞いにおいて、幼児は保育士が母親と同じように安全を保障する人であると感知し、安心感を育まれる。

保育士は母親が知っている人である。母親が知っている人は、幼児にはよい人である。そして、このよい人は、幼児にとって初めての部屋・保育所を知っている。よい人が知っている部屋は危険がない、よい部屋である。だから、怖いものはない。ここには脅えるものは何もない。こうして、幼児は安心してここで、行動し、多くを学ぶことができる。

しかも、幼児は自我が未生で芽生えはじめたばかりである。ことばもままならない。そのため、記憶は持続して流れてはいない。幼児の記憶は、ちょうどよどみに浮かぶうたかたのように、生滅している。したがって、母親がいない間、ずっと母親を思い続けることはない。幼児は、一日の時間の長さは分からない。幼児にとって、一日の時間はあるかないかに等しく、あっという間に終わる。幼児は大人の時間の連続性の中にはいない。そもそも、現代の時間は抽象的なもので、近代になって産業生産が進行する過程で生み出されたものである。メルロ＝ポンティは、このことを次のように解している。すなわち、「幼児はまことに状況そのものであって、状況に距離をとっていません。状況はその最も直接的な意味において把握されて…」[24] います。それゆえ、母親が幼児を迎えにきたという新しい状況が生まれた瞬間から、以前に起こった出来事は無効になっている。このため、幼児は母親の手から保育士に託されると、一瞬不安になるが、すぐ母親が迎えに来る。そうしたことが、ごく自然に、あたりまえのこととしてくりかえされる。それゆえ、幼児にとって、ここは安全で安心していられるところである。そして、三歳近くなる頃には、ことばも豊かになって、友だちと遊ぶこともできる。母親が迎えに来ても、帰りたがらない子も現れる。ここは、幼児にとって楽しく遊び、学べるところなのである。

もっとも、現代の保育所は、自然の環境が乏しく、幼児が自由に動き回ることができない。保育士は人為的な危険を防ぐため、幼児を箱ものの中に入れて管理しやすい。ここでは、幼児との関わりは三人称的なものになって、保育士、母親、幼児の自然な共同性が疎外されやすい。したがって、幼児にとって、両親と保育士が安全を保障し安心感を培う人であるとき、家庭と保育所は連続した共同体となりうる。ここに現代における新しい共同体の創造が期待される。このことは何よりも幼

児が母親と保育士に求めることに他ならない。

注

1）S. ミズン『歌うネアンデルタール　音楽と言語から見るヒトの進化』熊谷淳子訳、早川書房、2006.

2）F. de ヴァール『利己的なサル、他人を思いやるサル』西田利貞・藤井留美訳、草思社、1998.

3）M. J. ランゲフェルド『よるべなき両親』和田修二監訳、玉川大学出版部、1980、p.46.

4）M. J. ランゲフェルド『教育の人間学的考察』（改訳版）和田修二訳、未来社、1973、p.142.

5）K. Jaspers, *Die Idee der Universität*（1946), Reprint Springer-Verlag, Berlin, Heidelberg, New York, 1980, p.93.

6）河合雅雄『子どもと自然』岩波書店、1990、pp.76-77.

7）河合、同上書、p.81.

8）A. ポルトマン『人間はどこまで動物か』高木正孝訳、岩波書店、1961、p.60.

9）K. ローレンツ『ソロモンの指環』日高敏隆訳、早川書房、1973、p.195.

10）L. S. ヴィゴツキー『思考と言語』（上）柴田義雄訳、明治図書、1962、p.143.

11）B. Russell, *On Education, Especially in Early Childhood*, Unwin Books, London, 1973, p.55, 1st ed., 1926.

12）たとえば、斎藤隆介・作・滝平二郎・絵『モチモチの木』岩波書店、1971、p.10. 参照。

13）M. J. ランゲフェルド『教育の人間学的考察』和田修二訳、未来社、1966、p.90.

14）J. H. ヴァン・デン・ベルク『疑わしき母性愛』足立叡・田中一彦訳、川島書店、1981、pp.113-114.

15）A. J. Ayer, *Bertrand Russell*, The Viking Press, New York, 1972, p.70.

16）B. Russell, *Education and the Social Order*, Allen & Unwin, London, 1951, p.62, 1st ed., 1932.

17）B. Russell, *Marriage and Morals*, Unwin Books, London, 1967, p.99, 1st ed., 1929.

18）B. Russell, *Principles of Social Reconstruction*, Allen & Unwin, London, 1930, p.25, 1st ed., 1916.

19）ランゲフェルド、『教育の人間学的考察』前掲訳書、p.92.

20）O. F. ボルノウ『教育を支えるもの』森昭・岡田渥美訳、黎明書房、1969、p.50.

21）F. J. J. ボイテンディク『女性』大橋博司・斎藤正巳訳、みすず書房、1978、p.293.

22）A. Smith, *The Theory of Moral Sentiments*, The 8th, London, Printed for A. Strahan ; and T. Cadell jun. and W. Davies, Vol.I, 1797, p.1, 1st ed., 1759.

23）河合雅雄、『子どもと自然』前掲書、p.219.

24）M. メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1966、p.179.